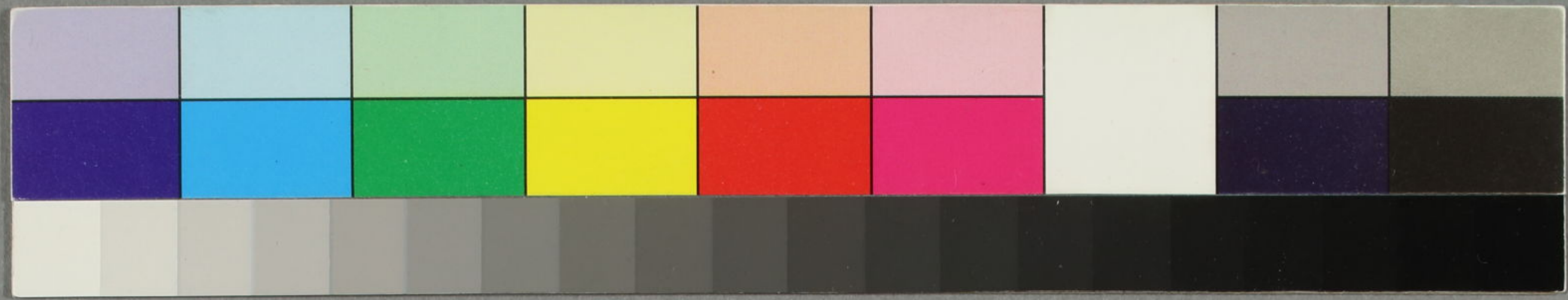


役者評判記

子13
3849
91







役者内百番

藝品定

大坂之巻目録

世の娘は羽衣の羽衣の中よりと

高田老殿は善い通商の色雲も

心園寺 秋不其名も 高砂乃

長員役者と唯も 加茂 三井と

狂い 女郎花や 白紙の老人まで

永留 後采 鞍 天狗 より

大木戸は 後通 堂 狂もか、 融

後通の 後 舍利 六 野丸 よりも

加は 見物の 安宅も 山姥 まで

今貝 芭蕉 雲 狂い 大入の 張紙

内

第

核後も場も **巻尾** の巻ひ **彈丸**

只 **服** **後** **鼓** の揚貴 **肥** け **ゆ** **め** **ふ**

座附 **お** **系** **色** **ぬ** 役者も **巻** **小** **一** **俵**

三 **輪** **と** **入** **く** **耶** **郎** の **捲** **と** **く** **く**

仕内 **思** **い** **入** **り** **た** **物** **も** **面** **白** **く** **巻** **小** **花** **の**

巻 **と** **入** **る** **屋** **心** **地** **山** **く** **巻** **小** **老**

役者の **玉** **の** **井** **玉** **首** **と** **夕** **鳥** **ど**

巻 **と** **入** **る** **都** **と** **勿** **福** **雅** **波** **も**

陶運 **の** **世** **の** **歳** **多** **長** **へ** **捲** **く** **挺** **女** **少** **て**

入 **を** **伏** **保** **山** **大** **山** **道** **成** **寺** **乃**

捲 **入** **る** **金** **札** **兼** **平** **の** **上** **方** **さ** **り**

元 **百** **万** **兩** **乃** **藏** **入** **り**

系大故大蓋布敷役者目録

糸 **小** **例** **大** **蓋** **布** **敷** **役** **者** **目** **録**

右 **名** **代** **大** **蓋** **布** **敷** **役** **者** **目** **録**

大 **蓋** **布** **敷** **役** **者** **目** **録**

無類 **中** **村** **秋** **名** **代** **小** **例**

▲ **巻** **頭**

左 **至** **上** **書** **市** **川** **園** **落** **日** **注**

右 **上** **上** **書** **市** **川** **園** **落** **日** **注**

▲ **巻** **頭**

▲ **巻** **頭**

▲ **巻** **頭**

▲ **巻** **頭**

上吉 中村十兵衛 角六
又斗の酒の酔の何方でも受のふ程

上吉 中山新五郎 角六
海のはぶつへ一流きて云猫

上吉 市川由十郎 角六
程々の仕やふみだれよき本城

上吉 中村秋七 角六
ぬつと出さぬが大さの色蕉

上吉 嵐三又郎 角六
大分唱者のよしの海軍歌

上吉 市川虎彦 角六
番巻付へたれで静か清経

上上 大谷紫雲 角六
そととつと慶がめり入ぬ森定

上上 嵐雛助 角六
おみどりてはあまよとあま雲雀山

上上 改宗重太郎 角六

上上 中川系公のよきとよか海船 角六
お名あいのうらさ花笠

上上 市川重太郎 角六
御親父のあまよとあまの大般若

上上 嵐樗三郎 角六
橋山四郎三△

上上 中村善次郎 角六
お三人ともお名歌の白乐天

上上 淡尾新平 角六

上上 淡尾八百蔵 角六

上上 淡尾孝次郎 角六
つづれもそれよるよる野鳥

上上 中村秋長 角六

上上 中村仲市 角六

上上 所長小徳次 角六
うらけお別びあまをぬ新右
中村樗三郎 角六

上上 款後みことごとのりる 出 出
中村東亮 水がへ
五段みさあきとてふ十方ふ 兵販

上上 三井松又郎 角瓦
番巻へふしやみふふ 車僧

上上 市川市郎 角瓦
宝おとろとあんとあつひ 履室門

上上 中山作亮 日瓦
ちようく 半程のおつとあつひ 松山後

上上 片屋鎌十郎 角瓦
仕中いよへふとあつひ 阿漕

上上 市川新四郎 水瓦
藤のつとあつひとあつひ 茶紙流

上上 尾上信三郎 角瓦
尾上野伊次郎 水瓦

上上 坂東守入郎 角瓦
出ろくろかーしうしん 堀北

上上 大谷方丸郎 日瓦
淡尾國次郎 角瓦
次村其市 日瓦
嵐東亮 △

上上 中村就亮 水
上 市川傳亮 日
上 市川宗子 日
上 中村弥助 日
上 嵐長兵衛 角
上 嵐岩次 日
上 市川新四郎 水
上 大谷方丸 日
上 中村宗十郎 日
上 淡尾重三郎 日
上 中村門次 日
上 嵐橋丸郎 角

上上 市川鯉十郎 水
近頃風のふらふらと他名入 極風
御親父の名と継ぎぬふらふら八幡

上上 道外亮車取之部 角瓦
淡村長四郎 角瓦
何と殺されてもあつひのつとあつひ 放下僧

上上 笠谷又九郎 水
相言のほろふとあつひとあつひ 捨侍

上上 一上 淡東岩太郎 水
一上 片屋亮又郎 角

上上 一上 淡東岩太郎 水
一上 片屋亮又郎 角

上上 一上 淡東岩太郎 水
一上 片屋亮又郎 角

上上 一上 淡東岩太郎 水
一上 片屋亮又郎 角

▲若女歌之部

上上吉

澤村國太郎

わづらひ

近はいあがり夫定のおつとく 田村

上上吉

藤川友吉

あまのこ

おふたごも枝ぶりのふと 梓木

上上吉

嵐富三郎

角屋

これのあこひたよりのふ 揚巻

上上吉

嵐勝光

わづらひ

女房やくちやとよのふ 女房巻

上上吉

中山一徳

角屋

おふぐ園とよとてあまの安宅

上上吉

淡尾南彦

日産

あつらうらうらふのふ 好夜

上上吉

淡川路之助

わづらひ

三味うら三國のあへりふ 長船

上上吉

中村弥女

日産

かろやとよとよのふのふ 橋川

上上吉

嵐吉之助

△

上上

嵐三三郎

わづらひ

上上

嵐福盛

あまのこ

上上

淡尾南彦

三井吉

上上

三林おのり

あまのこ

上上

淡川路之助

日産

上上

中村まのこ

わづらひ

上上

淡尾南彦

日産

上上

中村おのり

わづらひ

上上

中村松三郎

日産

上上

嵐寛三郎

日産

上上

尾上徳次郎

あまのこ

上上

みぎく おおのり

海士

上上

みぎく おおのり

海士

上上

嵐安三席 角花
嵐富次席 口花
神崎いさ香 口花
中村徳三助 角花

これおく 風流のふ 江戸の橋

上上

中村奇柳 角花
中村雲代 口花
中村松次席 口花
中村しん七 口花
坂東素次席 角花

どんく 芳流のころ 舞虫

上上

嵐如のふ 角花
中村松江 角花

海老の住りや上流の 綿本
云々上吉 中村松江 角花

角發殿敷子役之部

上上

大善齋之助 角花
中村松江 角花

上上

お二人りともおしつ 井筒
濱尾友発 角花
坂東素次席 口花
嵐川勝次席 口花
濱尾安次席 口花
濱尾素次席 口花
沢村多治右 角花

上

濱尾延之助 角花
中村頼三助 口花
中村健之助 口花
濱尾徳之助 口花

皆く 末たのり 小髻

市川勘次席 角花

市川新次席 角花

市川新次席 角花

市川新次席 角花

市川新次席 角花

市川照露山 一 中内分多部市
 淡尾改吉日 一 嵐市吉部角
 淡尾龜之安日 一 嵐秀吉日
 淡村乙吉日 一 嵐三吉日
 淡村改吉部日 一 大若部之助日
 淡村徳吉部日 一 嵐寛之助日
 嵐吉部日 一 中村力吉日
 中村吉部日 一 中村達之安日
 中村金之助日 一 中村吉之安日

▲頭取之部

坂東國太田山 山々
 淡尾改吉部日 山々
 大若万九部 山々
 坂東國又部 山々
 相控吉部 山々
 巻抽
 淡尾額十部 山々
 上上吉

▲別産之部

上吉 中村改助 角産
 市川綿車 角産
 上上 市川綿車 角産
 上吉 市川綿車 角産
 市川綿車 角産
 市川綿車 角産

▲後見

至極上吉

斤岡吉部

▲羅子之部

小例之部

南例之部

淡出市十部 一 嵐吉部
 三若村吉正陸 一 三若村吉正陸
 花相亦十部 一 花相亦十部
 返吉田最前 一 返吉田最前
 中村吉部 一 中村吉部
 淡出門十部 一 淡出門十部

日 中村政吉	一 家 和田竹八
日 梓長松三郎	一 家 菅村大助
三 田中却三郎	一 家 廣瀬喜作
日 花相万藏	一 家 新野仙吉
日 花相兼藏	一 家 笹井安次郎
日 中村金次郎	一 日 進井大三郎
日 梓長嘉吉	一 日 市川茂平
日 香竹山五吉	一 日 鈴木松吉
日 中村由翁	一 日 竹本三六次郎
日 小川秀吉	一 日 竹本入左夫
日 田中信兵衛	一 日 橋本吉造
日 岩崎熊吉	一 日 橋本松造
日 岩相傳十郎	一 小 別之部
日 田中傳治	一 日 竹本武吉夫
日 田中滋次郎	一 日 藤金沢右吉夫
日 市村冬吉	一 日 竹本信吉夫
日 藤崎文三郎	一 日 竹本渡吉夫
日 山村友次郎	一 日 橋本元吉

角の姓之部

日 張崎 竹山意次	一 家 織田万吉
日 藤 岡上四郎	一 家 小川意次郎
日 藤 岡出長三郎	一 家 小松伊三郎
日 竹山嘉吉	一 家 芳沢弥三郎
日 藤 岡政吉	一 家 小川元吉
三 法 梓長正隆	一 日 大谷十吉
日 坂東安吉	一 日 市村飛吉
日 坂東吉次	一 日 竹本全吉夫
日 岡間十郎	一 日 竹本吉吉夫
日 坂東源吉	一 日 藤 飛沢安男
日 小川春三郎	一 日 藤 飛沢久吉
日 小川定吉	一 日 山村友次郎
日 小川伊三郎	

姓音他者之部

有例之姓

近 栗 繁 造
 近 栗 齋 造
 近 栗 藤 造
 近 栗 弥 七
 近 栗 義 彌
 井 筒 一 弁

小例之度

金沃芝洛
金沃金助
金沃銀助
金沃楳助
奈河桑助
近麦多助
金澤龍玉

角之度

法直納老
天教万夜
奈河力助
近麦政助
奈河助助
並本字卷
井筒一亦
金山寶助

多垂堪家采乐叶

▲附録之部

上上書

法尾内也

在吉發身より入内と

尚洪
若老史 乾政

上上書

中村藤路之助

由河へ地之河後移し

由河より
移す 控乃楳

上上

中村楳助

曾へ入渡へ移して所矣

尚洪
若老史 和布助

上上

市川三十

主比ちとんとお取と

此の
延 延

上上

中村村老

藤雲の位より不換の功

此の
延 延

▲その外の流舟の階級ありし

比西ぶちりし門ありしや中上書あり
又政士成子年十二月十七日

廓應了然信士 金沃芝助

寺へ天波西吉所之林寺 行年五十一才

素行十太曲史之造より令保良の門に入
此の事も進み河上達して不換の功もは後美泉
の御者ともありしと申すは是れをかくし
よるしく河田向移すひと申す

徳元や福や親と親乃

世宗の御代に由りて世宗の御代

千早播磨の御代に御代の御代

流と波を年々歳々く来りて御代

目出度も面白やと拍あやみ送ひ家

正行を御代清との御代に御代

一年も光陰去の如く去るは御代

の御代に御代に御代に御代

も御代に御代に御代に御代

の御代に御代に御代に御代

の御代に御代に御代に御代

仕付の御代に御代に御代に御代

めけて御代に御代に御代に御代

の御代に御代に御代に御代

小衣食位の御代に御代に御代

難者の御代に御代に御代に御代

目出度不御代に御代に御代に御代

毎年の御代に御代に御代に御代

尚書に御代に御代に御代に御代

ありての御代に御代に御代に御代

おありての御代に御代に御代に御代

衣袋と御代に御代に御代に御代

重さの御代に御代に御代に御代

の御代に御代に御代に御代

年々御代に御代に御代に御代

おありての御代に御代に御代に御代

おありての御代に御代に御代に御代

おありての御代に御代に御代に御代

これに先より我々が日頃より
を役者頼む所定と致すよと致すを
今年大高直定とあるに先づ去冬
より好者の心遣申進大直定より
津島内いしきおのれらめておま
入来せぬらと致すよと致すを
冠者と申出て申致すを致すを
ち御冠者よりつりていしき
会のありしは申出の余のそ
のいしき例の無直定よりや近頃
免角直定もふれ候か致すを
お振立て申出てもも稀なる
むういしきも入附んと致す
又御殿直定よりいしきと致すを
くはるるも申出のいしきと致す

それより今今今今今今今今今今
彼れより申出のいしきと致すを
掛かると申出のいしきと致すを
ううのいしきと申出のいしきと致すを
のいしきも申出のいしきと致すを
おと申出のいしきと申出のいしきと致すを
ろろと申出のいしきと申出のいしきと致すを
また申出のいしきと申出のいしきと致すを
あつと申出のいしきと申出のいしきと致すを
と後申出のいしきと申出のいしきと致すを
程のいしきと申出のいしきと申出のいしきと致すを
と申出のいしきと申出のいしきと申出のいしきと致すを
ろろと申出のいしきと申出のいしきと申出のいしきと致すを
また申出のいしきと申出のいしきと申出のいしきと致すを
あつと申出のいしきと申出のいしきと申出のいしきと致すを
と後申出のいしきと申出のいしきと申出のいしきと致すを
程のいしきと申出のいしきと申出のいしきと申出のいしきと致すを
と申出のいしきと申出のいしきと申出のいしきと申出のいしきと致すを

はたの巻巻たるの巻別巻とあるは甲と

首尾巻巻別巻と校は甲と巻中とあり

はたの巻の巻巻各極方なるは甲と

述巻中とあり外（一）とあり

甲と首尾巻巻とあり

字の極巻巻の極巻中（一）

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

巻中巻とあり

これ彼をせりて存せしりれりるらん
まな^一難^一とや^一左^一右^一とてなむと補す其い
是れのとすなりを^一交^一結^一すとて言ひしり
るなりと違ひたれ^一院^一其^一又^一を^一とて言ふ

今^一後^一小^一南^一西^一初^一ま^一とて言ひしりて
本^一と^一不^一不^一其^一とて言ひしりて
後^一と^一言^一は^一は^一附^一其^一の^一後^一で^一後^一の^一出^一の^一最^一後^一に^一
衣^一と^一最^一後^一の^一衣^一とて言ひしりて
彼^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
切^一好^一其^一の^一衣^一とて言ひしりて
と^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
六^一月^一亦^一不^一其^一とて言ひしりて
何^一れ^一は^一後^一も^一初^一ま^一とて言ひしりて
着^一不^一今^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
り^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて

別^一附^一其^一の^一後^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
く^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
市^一の^一衣^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
口^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
初^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
さ^一の^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
出^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
後^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて
後^一と^一言^一は^一は^一初^一ま^一とて言ひしりて

大なるものなり [一] 二級鬼面て花標と
 傳ふ所と後ゆひて布衣 [二] 後通入
 赤き智恵舟 [三] 後ゆひて布衣 [四]
 下の住居 [五] 後ゆひて布衣 [六]
 三等 [七] 後ゆひて布衣 [八]
[九] 切み赤き花標の標の形 [一〇] 後ゆひて
 出されし [一一] 後ゆひて布衣 [一二] 後ゆひて
 後ゆひて布衣 [一三] 後ゆひて布衣 [一四]
 又又標の標の形 [一五] 後ゆひて布衣 [一六]
 又又標の標の形 [一七] 後ゆひて布衣 [一八]
 又又標の標の形 [一九] 後ゆひて布衣 [二〇]
 又又標の標の形 [二一] 後ゆひて布衣 [二二]
 又又標の標の形 [二三] 後ゆひて布衣 [二四]
 又又標の標の形 [二五] 後ゆひて布衣 [二六]
 又又標の標の形 [二七] 後ゆひて布衣 [二八]
 又又標の標の形 [二九] 後ゆひて布衣 [三〇]

ら [一] 後ゆひて布衣 [二] 後ゆひて布衣 [三]
 又又標の標の形 [四] 後ゆひて布衣 [五]
 又又標の標の形 [六] 後ゆひて布衣 [七]
 又又標の標の形 [八] 後ゆひて布衣 [九]
 又又標の標の形 [一〇] 後ゆひて布衣 [一一]
 又又標の標の形 [一二] 後ゆひて布衣 [一三]
 又又標の標の形 [一四] 後ゆひて布衣 [一五]
 又又標の標の形 [一六] 後ゆひて布衣 [一七]
 又又標の標の形 [一八] 後ゆひて布衣 [一九]
 又又標の標の形 [二〇] 後ゆひて布衣 [二一]
 又又標の標の形 [二二] 後ゆひて布衣 [二三]
 又又標の標の形 [二四] 後ゆひて布衣 [二五]
 又又標の標の形 [二六] 後ゆひて布衣 [二七]
 又又標の標の形 [二八] 後ゆひて布衣 [二九]
 又又標の標の形 [三〇] 後ゆひて布衣 [三一]

小部（大さ）と（上）宿在場所と通の下の
出ずることの多しき事と其の
仕方違ひの多しき事（すなわ）と云ふこと
昔（昔） 宿在して居る所をわたりて行つて
こゝに宿在する所の多しき事と云ふこと
と云ふ所（上）と云ふ事と云ふこと（上）
それと云ふ事は遠くとも其のまゝとて行つて
つる所は其の多しき事と云ふ事と云ふこと
大連君の又指針（上） 宿在の宿在の事と云ふこと
宿在の宿在の事と云ふ事と云ふこと
市場の事と云ふ事と云ふ事と云ふこと
也（上）も其の物（上）の多しき事と云ふこと
お宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
もぬいひと云ふ事と云ふ事と云ふこと
同宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
その事知るの事と云ふ事と云ふこと
柳宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
按宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
わち申すも其の事と云ふ事と云ふこと（上）
お宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
お宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
お宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
お宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
お宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
お宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと
お宿在の事（上）と云ふ事と云ふこと

喉を絞るをさるゝ又擗別かめりて[三]其の
 けりて其の致被齋史がむ人附りてさ
 致三[四]其の致被齋史がむ人附りてさ
 されりて中かむりては[五]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[六]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[七]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[八]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[九]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十一]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十二]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十三]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十四]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十五]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十六]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十七]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十八]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[十九]其の致被齋史がむ人附りてさ
 後[二十]其の致被齋史がむ人附りてさ

大[一]其の致被齋史がむ人附りてさ
 志[二]其の致被齋史がむ人附りてさ
 師[三]其の致被齋史がむ人附りてさ
 の[四]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[五]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[六]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[七]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[八]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[九]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十一]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十二]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十三]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十四]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十五]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十六]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十七]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十八]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[十九]其の致被齋史がむ人附りてさ
 其[二十]其の致被齋史がむ人附りてさ

て... 山崎と... 巻二十一
に... 山崎と... 巻二十一
あ... 山崎と... 巻二十一
葉... 山崎と... 巻二十一
行... 山崎と... 巻二十一

七... 山崎と... 巻二十一
も... 山崎と... 巻二十一
さ... 山崎と... 巻二十一
あ... 山崎と... 巻二十一
は... 山崎と... 巻二十一

個... 山崎と... 巻二十一
御... 山崎と... 巻二十一
外... 山崎と... 巻二十一
ら... 山崎と... 巻二十一
の... 山崎と... 巻二十一

あ... 山崎と... 巻二十一
中... 山崎と... 巻二十一
中... 山崎と... 巻二十一
亦... 山崎と... 巻二十一
持... 山崎と... 巻二十一

く... 山崎と... 巻二十一
あ... 山崎と... 巻二十一
三... 山崎と... 巻二十一
よ... 山崎と... 巻二十一
あ... 山崎と... 巻二十一

ん... 山崎と... 巻二十一
あ... 山崎と... 巻二十一
か... 山崎と... 巻二十一
し... 山崎と... 巻二十一
ち... 山崎と... 巻二十一

小まづさるるて余の侍者つがひとさるるまぶ
 せりともむらつてあるかたの [国] 其れを
 解のふけ格別毎にさるるまぶ打別と
 びまぶ侍者たるまぶ侍者の中目録とく
 [録] ついでこの番の侍者たるまぶ

▲ 巻頭

至^左上吉 回 市川団扇 小判
 上^右上吉  嵐 鶴 寛 角 狂

賢いもの侍者たる後後三河倉太ふ侍者の
 侍らるるまぶ侍者たるまぶ侍者のまぶ
 後唐の之類のまぶ侍者たるまぶ侍者のまぶ
 侍らるる [国] 後冠物たるまぶ侍者のまぶ
 侍らの場侍者たる侍者たるまぶ侍者のまぶ
 侍らるるまぶ侍者たるまぶ侍者のまぶ

侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ
 侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ

侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ
 侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ

侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ
 侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ

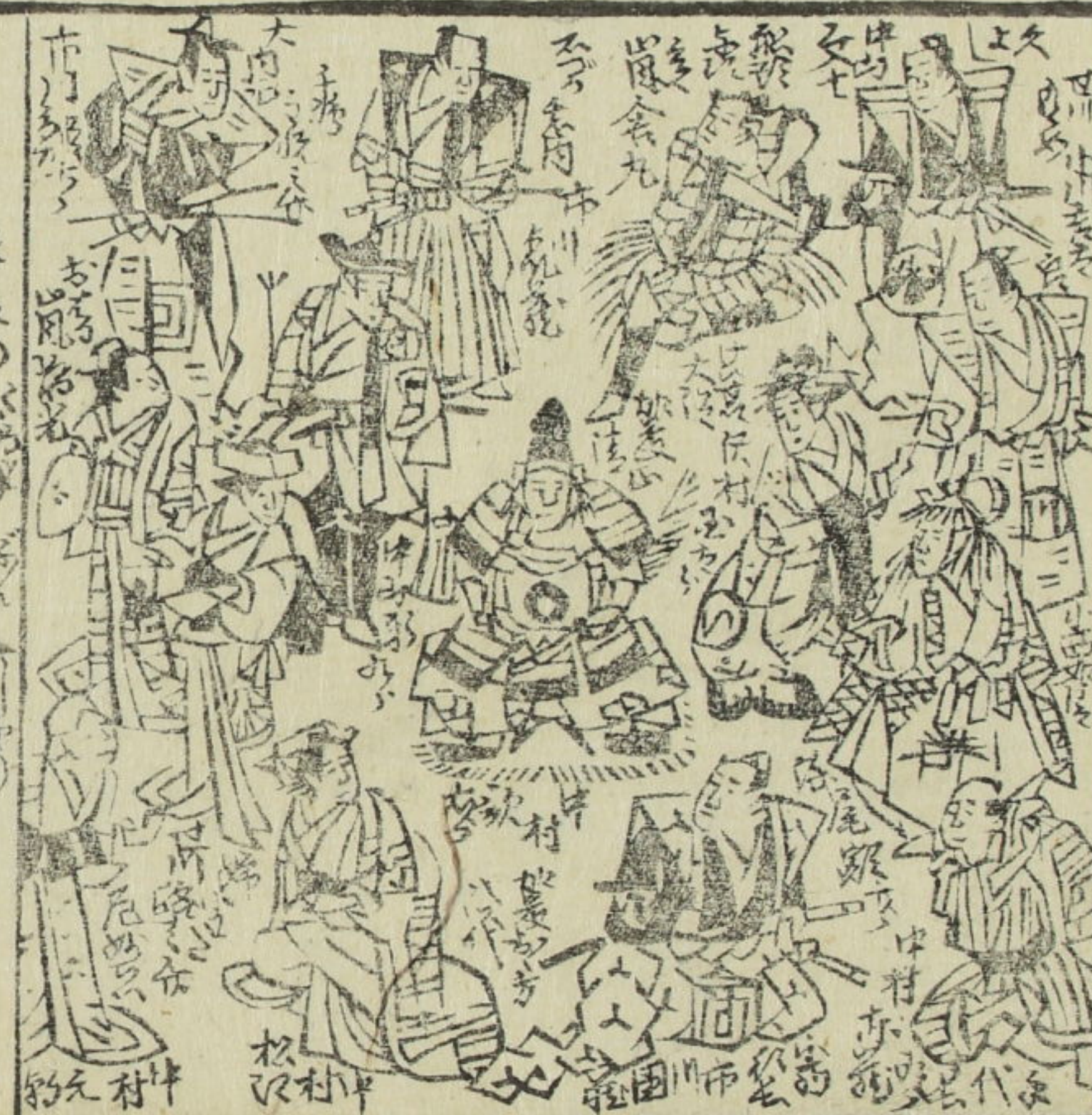
侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ
 侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ

侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ
 侍らるる [国] 侍者たるまぶ侍者のまぶ



不承月旦の由りて
は其遊山櫻

代名 早雲長大夫
龜谷采之原



切狂言 文藝 廓文章 吉田彦江



三百年後寺
御羅先代秋
代都 万大夫



切狂言 義経腰越伏 三三の如



とて幸奉候に或は事申す候に立寄
 牛摺候は多少を立寄るに下り候事
 にはかゝる事申す^{中六}切替候事申す事
 申候事^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}
^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}
^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}
^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}
^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}
^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}
^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}
^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}申す事^{申す}

かく大股のなるを立寄る候事^{申す}
 陽氣と云ふ事候は候に候に候に候に
 申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}
^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}
^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}
^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}
^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}
^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}
^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}申候事^{申す}

超絶の波と動のりごとや中地中
西の山に津波のりごとや中地中
の地盤を成つて津波のりごとや中地中
川内へ入る津波のりごとや中地中
たまたま津波のりごとや中地中
らまは津波のりごとや中地中
ま津波のりごとや中地中
た津波のりごとや中地中
中津波のりごとや中地中
津波のりごとや中地中
切つた津波のりごとや中地中
の津波のりごとや中地中
見ると津波のりごとや中地中
四津波のりごとや中地中

大方の波のりごとや中地中
後津波のりごとや中地中
有る津波のりごとや中地中
の後津波のりごとや中地中
[F] 首のりごとや中地中
みど津波のりごとや中地中
らと津波のりごとや中地中
[際] 切津波のりごとや中地中
か津波のりごとや中地中
去津波のりごとや中地中
是と津波のりごとや中地中
面津波のりごとや中地中
中津波のりごとや中地中
首のりごとや中地中

故亦

是を幸の小事扱の上にて... 川東よりの... 柳林平段... 世曾し... 柳林平段... 世曾し... 柳林平段... 世曾し... 柳林平段... 世曾し... 柳林平段... 世曾し...

乙

加賀

私方でも大位と上りての外と云々其れ目出
へく主は田舎ヤリと改条く

上吉 ④ 小川吉太郎 少ハ

○國の社三のうう天は素戔嗚尊行命令之助
嵐山の平ふまじと云々此れ社を其の
元持ぬるゝふ持ぬるゝ此れ二が亦再整
ふ善哉 ○三行を上乗と有例で善美海
亦多自他を改定く積山は他多海を改
知子改定く改定海を改定海なるは
又の取定く ○宿屋を改定く亦亦
仕向が十分かく出せさしんか木と云々
この ○三行を改定く亦亦
の再方改定く亦亦
此れは○三行を改定く亦亦
又の取定く ○三行を改定く亦亦
仕向が十分かく出せさしんか木と云々
この ○三行を改定く亦亦
の再方改定く亦亦
此れは○三行を改定く亦亦
又の取定く ○三行を改定く亦亦

甘
上吉 ④ 中村十彦 有が
○三年の洋和で七五八の初年が大成

八月廿二日 申上吉 中山新の節 如例
賢二様迄分まの親父共来申共先夫後ハ
おふをいじいふまやぬまへ申共先夫後ハ
お完事筆力被たかひかたの指考公事
指考公事この指考公事ハ申共後類公事
松江同前公事先夫後公事ハ先夫後公事
あ七の年布以多田親父公事ハ公事
言公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事ハ
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事

二日大物三節の事にてふあ申共の節
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事

先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事
先夫後公事ハ先夫後公事ハ先夫後公事

上上

回

市川流巻 小別

既井筒流巻とある事々々ありあつたりんを
功者かたをてりあれ、天酒をのり代
りあつたりんをてりあれ、てりあれ
あつたりんをてりあれ、てりあれ
大極をのりあれ、てりあれ
日酒をのりあれ、てりあれ

上上

⊕

大谷は東云△

既既既既既既既既既既既既既既既
方々の方々の方々の方々の方々の
上上

上上

⊙

嵐 雛助 あり

既既既既既既既既既既既既既既既
めこのめこのめこのめこのめこの
が不事法、河の女を、てりあれ、
平氏谷角芳川流巻二巻より切り

早キとてりあれ

上上

⊗

坂東方とあり

既既既既既既既既既既既既既既既
大代敷か各各各各各各各各各各各
てりあれ、てりあれ、てりあれ、

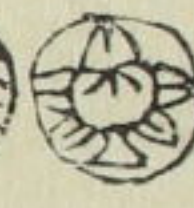

上上

回

市川流巻 あり

既既既既既既既既既既既既既既既
てりあれ、てりあれ、てりあれ、
てりあれ、てりあれ、てりあれ、

款村の揚助史のり新七の出来申すも七
ふんまふんまふんま

上

山崎三郎 角丸

揚山三郎三
中村三郎 山崎

國嶋氏の先世は四代前代もよくかきぬも
は改定するに改定は改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定

上上

改定改定は改定もよまの改定もよまの改定

改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定

改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定

改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定
改定改定は改定もよまの改定もよまの改定

案は推恩令の甲を律の甲とす

是れわづらひ勅を日如く

案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

案の案の案を重んずる

日々に勤めたることこそが世の道なりと
あつて教の伴をかてははるの教をせん
か^二 [西] 院のありたるゆゑに持生を
か^一 りとせむはまをいふはるものたを
他の格別にはあつたはるものたを
いふはるものたをいふはるものたを
念ふはるものたをいふはるものたを
以上述べたはるものたをいふはるものたを
中へとあつたはるものたをいふはるものたを

八文舎

作者 梅枝軒 自 笑
泊 鷲

文政十二己丑年

正月吉日

長百六十五番上反巻終

文政
己丑

後著内必書

京都
大下
空屋

5 13
286
~~166~~
166

手 13

後者の百番

實惡敵殺之部

切吉

⊕

大谷友左衛門 角注

大谷友左衛門の事はわづらひに實惡敵殺

の部の中程素花様は白旗をたて

陶市之冠千部共殺殺りて

若殿は仕入也と云ふ也

此の將と云ふは延喜式に

見ゆる方と云ふは

酒の所持人の味方

寛政七年南の社

の御旗は白旗と云ふ

はれしと云ふ類は

百部共之の御旗

の仕方の云く

七段後擲當

○**上吉** **○** 濟尾奥山 奇例
賢濟尾氏より外へ出るものと桑野
がどどあつ外中けき絶境の層のその
門多中 桑野切之と其のまをたむはたを
其練中 桑野切之と其のまをたむはたを
○**上吉** **○** 濟尾奥山 奇例
賢濟尾氏より外へ出るものと桑野
がどどあつ外中けき絶境の層のその
門多中 桑野切之と其のまをたむはたを
其練中 桑野切之と其のまをたむはたを

○**上吉** **○** 濟尾奥山 奇例
賢濟尾氏より外へ出るものと桑野
がどどあつ外中けき絶境の層のその
門多中 桑野切之と其のまをたむはたを
其練中 桑野切之と其のまをたむはたを
○**上吉** **○** 濟尾奥山 奇例
賢濟尾氏より外へ出るものと桑野
がどどあつ外中けき絶境の層のその
門多中 桑野切之と其のまをたむはたを
其練中 桑野切之と其のまをたむはたを

○**上吉** **○** 濟尾奥山 奇例
賢濟尾氏より外へ出るものと桑野
がどどあつ外中けき絶境の層のその
門多中 桑野切之と其のまをたむはたを
其練中 桑野切之と其のまをたむはたを

将軍様御座り候と云ふ事と申せ候は向う
 跡家御座り候と云ふ事と申せ候は向う
 二ヶ坊との御座候事な御座り候と申せ候は向う
 合間九ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 三ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 四ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 五ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 六ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 七ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 八ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 九ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十一ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十二ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十三ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十四ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十五ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十六ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十七ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十八ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 十九ヶ坊の御座候事と申せ候は向う
 二十ヶ坊の御座候事と申せ候は向う

上上
 中村元船

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

唐書卷之六十四

合其美を奉る所のはるひあわさく
切陽田春の池の玉草多の 四 飛標
ひよこを何ぢり 四 飛標 四
美草多の草六何七の 四 飛標 四
く 四 飛標 四
挿の標 四 飛標 四
 四 飛標 四
 四 飛標 四

上声



中村善徳

角注

賢方のこの小御堂を建てては長表の村
並様と改名せられたは後城の並様と若
きと並様と並様と存はは二痛と若
泥ち坊の登の池の 四 飛標 四
力 四 飛標 四
上村 四 飛標 四
と 四 飛標 四
伏 四 飛標 四
り 四 飛標 四

上声



改東園文部

角注

賢方のこの小御堂を建てては長表の村
並様と改名せられたは後城の並様と若
きと並様と並様と存はは二痛と若
泥ち坊の登の池の 四 飛標 四
力 四 飛標 四
上村 四 飛標 四
と 四 飛標 四
伏 四 飛標 四
り 四 飛標 四

市橋共おのり橋あり近頃の
 活多事せぬ事律此後志絶橋あり
 芳平冬屋の浦二百九村とせれり
 橋見文お名書入あり此の事
 お勸修せんく八百の角の度山
 て大塔より赤松律師より其
 物さなりづ三平及彼お岩
 子とせしむる所なり老
 後并浪多めとありは
 院お岩帯と事牧方お
 分ありはひとありと
 主

○

所國蝶千綿 角元

又多事とごらんと
 勸定ありて
 浦堂平江浦
 望見ありて
 上上

○

中山他

既お
 中
 三十七
 名相
 法村
 前
 中
 世
 必

陽光史との出合南村に於ていふより

賢七は中野に居て難波に渡りて

中野に居て難波の又中野より

公清遠のこゝろに切替を飛脚に

渡りて先づ先づの切替を勤

しとてまうし切替の切替

は本格的な切替の外に

中野の切替を飛脚に

がよる切替の切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

切替を飛脚に切替を飛脚に

かかるとは後の習書の大切なりとて又
がむを[空]移り移るは法を法て後
こころも勤る如き日の評判もを在念く
れは空の中の後なる法儀の法なる後[善]如
小か[善]如法なること亦も法なること
まよと移り評定と答も[善]の法なること
は抑もかたも評定する[善]如評定
長も[善]亦西[善]如移り偶同春と評定
の評定も[善]亦[善]如移りかたも評定
かかるとは移り評定のかたも評定する[善]
[善]如移り評定のかたも評定する[善]
此の法なること[善]如移り評定する[善]
ことなること[善]如移り評定する[善]
秋評定移り評定する[善]如移り評定する[善]
[善]如移り評定する[善]如移り評定する[善]
と移り評定する[善]如移り評定する[善]
か連中の法なること[善]如移り評定する[善]
は移り評定する[善]如移り評定する[善]
[善]如移り評定する[善]如移り評定する[善]
かは法なること[善]如移り評定する[善]
[善]如移り評定する[善]如移り評定する[善]
後なること[善]如移り評定する[善]
かかるとは法なること[善]如移り評定する[善]
かかるとは法なること[善]如移り評定する[善]
よる[善]如移り評定する[善]如移り評定する[善]
が善なること[善]如移り評定する[善]如移り評定する[善]

▲道外花車形之部

上吉 (5) 沢村長太郎 貞正

[善]如移り評定する[善]如移り評定する[善]
かかるとは法なること[善]如移り評定する[善]如移り評定する[善]

仕者もあましく 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

陸奥の地味も 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

多岐の万藤より食海をくむ三系程余り
坊よりと園は相次ぎて人の心をなす
[き]とやあまののりさかぬりとのり
中よりこのまをぬりて[隆]切
須川境の新地を多岐の地とてしよ
なり。三橋の地切を赤坂の地切とす
[隆]と大崎の地切[隆]の地切と大崎
こは地切天の三系角を中令地切
られまき助の地切を安坊とす津流
三系角の地切を元津とす後三系角
西系角の地切を元津とす地切は
央の地切を安坊の地切とす地切は
元津の地切を安坊の地切とす地切は
向よりあれは津と美流の地切は
[隆]と大崎の地切は津と美流の地切
其の地切は津と美流の地切は
津の地切の地切を安坊の地切とす
美流の地切を安坊の地切とす
[隆]と大崎の地切は津と美流の地切
こは地切を安坊の地切とす地切は
下は津美流の地切を安坊の地切とす
たは地切を安坊の地切とす地切は
と元津令地切を安坊の地切とす
地切の地切を安坊の地切とす地切は
後(相次)たは津美流の地切を安坊の地切とす
物水より[隆]と大崎の地切は津と美流の地切
付てより地切を安坊の地切とす地切は
と地切の地切を安坊の地切とす地切は
地切の地切を安坊の地切とす地切は
地切の地切を安坊の地切とす地切は
かきまきと地切の地切を安坊の地切とす地切は

多岐

三系角

待格もてゆめも七をいさひのりかぬ後
 の里の令成をきりきりまてあて百世に傳
 られ難きの仕由は後捕の飛ぶまじり
 申す二申す申すの事西原日よ併度神の事
 物とすうつがあやまきし【場】三度津鹿
 物とすうつがあやまきし【場】三度津鹿
 一也六もまじりしと後述とがての格ひ
 のうまじりし二申す申すの事【場】
 申述の事あての事後述の事いし事
 くにはあての事あての事あての事
 申方後の事【場】あての事あての事
 合ての事あての事あての事【場】
 切着井田の事あての事あての事
 もふあての事【場】あての事あての事
 申すの事あての事あての事【場】
 後述の事あての事あての事【場】

いか人の洋よりか合てあての事あての事
 三度の事あての事あての事【場】
 申すの事あての事あての事【場】
 後述の事あての事あての事【場】
 さふあての事【場】後述の事あての事
 かああての事あての事あての事【場】
 切及後述の事あての事あての事【場】
 うまひあての事あての事【場】あての事
 申すの事あての事あての事【場】
 女あての事あての事あての事【場】
 後述の事あての事あての事【場】
 申すの事あての事あての事【場】
 申すの事あての事あての事【場】
 申すの事あての事あての事【場】
 申すの事あての事あての事【場】

と云ふ如きの情にてさうな女政の事と云
 へり（一）流るる満後（一）おのゝ鳥やふるん
 のいぶがごとく（二）（三）何れ格別否と云
 おはせく（一）おのゝ鳥（一）と頼もて

上上吉 ○ (一) 貴富三帝 角社

既而固固の事と云へば外夷中の
 性事記置ぬけは其意を後序三帝
 共のいふの言おとすもて中々か延曼
 との事命もよす（一）（二）義好曲成のけのり
 場は「あまのりく」や女取れおとす
 （三）後序の事と云ふの委ね（三）（四）
 のあまのりく（一）（二）既而固固の事と云へば
 の性事記置ぬけは其意を後序三帝
 共のいふの言おとすもて中々か延曼
 との事命もよす（一）（二）義好曲成のけのり

○ (一) 貴富三帝 角社

作具の虫動の之偶固者亦非な流れき切
 下念には既法（一）やな多ありてす
 小の平測（一）止る事三代知府既偶因
 川はをて二や其津もすの誓う天は既
 大峰をえは其のやの流れたるあり
 圓（一）素御老女と云ひ（二）のりく（三）ありて
 借見えとねのひくもあとの津利もあこ
 二やお射のりくありて（一）上三平津流れ
 之流れそとりのありて（二）既而固固の
 性事記置ぬけは其意を後序三帝
 共のいふの言おとすもて中々か延曼
 との事命もよす（一）（二）義好曲成のけのり
 場は「あまのりく」や女取れおとす
 （三）後序の事と云ふの委ね（三）（四）
 のあまのりく（一）（二）既而固固の事と云へば
 の性事記置ぬけは其意を後序三帝
 共のいふの言おとすもて中々か延曼
 との事命もよす（一）（二）義好曲成のけのり

○ (一) 貴富三帝 角社

加賀見山廟傳本

道頓堀角屋
名代大坂
庫本行岡嶋丸



在言 玉平寶藏入續万戸



六三三

中多々の望る長後をりてふらぬであ
りし^{〔三〕}二や又興元をふて播磨を
の盟をすむ故うとて人の外にたう実
にむらじりあつたてふていづかひも
^{〔四〕}物に相違なく申す時をいづかひも
おれどもいふ^{〔五〕}先物も今評判さう
く指がもよほれぬはしを絶たせられ
ぬ世々今の方

上上言  波尾勇次郎 貞次

^{〔六〕}駿井前左の守貞のおもひでてふま
せ、浪義はけりてふたれども金時
御承りおれずし三行ある例に上ま
て後述しよかまへ後城への増多後山
女と連多をたつこの世をたつたて
すし^{〔七〕}のあつたてはのあつたては
たれり作田をたつたてはのあつたて

はあが冬ふてなむらめつたては
今以後^{〔八〕}三行向くまはては
ふとの世は系をたつたては
ふたれども二やお承りあつたては
そののあつたてはあつたては
二やあつたてはあつたては
二やあつたてはあつたては
あつたてはあつたては
あつたてはあつたては
あつたてはあつたては

上上



波尾勇次郎 貞次

^{〔九〕}駿井前左をたつたてはあつたては
あつたてはあつたてはあつたては
あつたてはあつたてはあつたては
あつたてはあつたてはあつたては
あつたてはあつたてはあつたては
あつたてはあつたてはあつたては
あつたてはあつたてはあつたては

徳と云れりし三條御斗と云ひし事
琴の曲をりし三條の御公を
[醫]中の左巻に吳服中よりしては
より南の方を歩み給はるる中より被け
るより先きに御座りし御座りし深川路
者より三の門より先きに御座りし御座りし
高道より先きに御座りし御座りし
柳邊より先きに御座りし御座りし
の御座りし御座りし御座りし御座りし
又これ送ひ給はるる中より被け
るより先きに御座りし御座りし御座りし
まはらば御座りし御座りし御座りし
墓より先きに御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし

此の御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし

上 中村歌女 山

[醫]中村の御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし
より先きに御座りし御座りし御座りし御座りし

諸君一宮にあらざれば後と云ふべし
若流のれがたれぞと云ふ相場の色も
て天下の人のいふと云ふ後と云ふ
に糸也三行にたがふと云ふ相場の
夫由也と云ふと云ふ相場の
行はれぬと云ふと云ふ相場の
小と云ふと云ふと云ふ相場の
出づるやとの色も切也と云ふ
三つたてと云ふと云ふ相場の
乃と云ふと云ふと云ふ相場の
年の勤めと云ふと云ふ相場の
乃のほたけと云ふと云ふ相場の
おとふのさかと云ふと云ふ相場の
上 山吉之助△

後と云ふと云ふと云ふ相場の
三行の房と云ふと云ふ相場の
後と云ふと云ふと云ふ相場の
上 山吉之助△

山吉之助△
山吉之助△
山吉之助△
山吉之助△
山吉之助△

上 山吉之助△
山吉之助△

く二重の井のさへ殺人者く落付
てまのうらみかかゝ島村女形に
入るく四半併ぶといふのさうと
おぼしき足部を世の大あうでめて
若女若女若女

重吉 中村松江 小例

賢公もあつたをいふとさう
致すともおぼしきものなほ
し國の産物も松茸致す二二月
とてたの寺に何とてまのうら
け鼻のうらみかかゝ松茸致す
所もいふおぼしきものなほ
本て山形松江のびそま致す
様は松茸致すおぼしきものなほ
文七丈三寸のさへいふと
七丈三寸のさへいふと
松茸致す

とゆへ先づ松茸致すおぼしきものなほ

るの致すおぼしきものなほ

三早者のものおぼしきものなほ

重吉 中村松江 小例

のゆへ先づ松茸致すおぼしきものなほ

成びの致すおぼしきものなほ

のゆへ先づ松茸致すおぼしきものなほ

とてまのうらみかかゝ松茸致す

せむとて松茸致すおぼしきものなほ

く三重吉 中村松江 小例

とてまのうらみかかゝ松茸致す

後向松江のさへいふと

十部重吉のさへいふと

のゆへ先づ松茸致すおぼしきものなほ

より長くなること致されぬやうに

とてしり[國]はたてぬ難いなりとの事

か定まらぬなり又またさきの終考の事

や為す御心極まり申す旨の條に本が

おたがひの事おたがひを申すも勅せられた

物にてしは及べ別て辨別せりて大なる

おかし極くは極後七代に例に上りて三

代に及ぶ所の事を致上素とつて辨別せり

布はりの物に改とぬ出給の事とて後次

代の事と申す事ありとて[國]ての事あり

出給の事とて[國]内の改行ある事あり

等とてしり又また上の事とて改行の事

に申すも辨別せりて申す事ありとて

とて申すこととてしり[國]二年の改行の事

に申すも[國]内の改行ある事ありとて

改行の事とて[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

とて申すも[國]内の改行ある事あり

今有後之方鏡を七種といふ所は元
 へ後よりありきし二やむね雨の八か所
 入つたての外境をいへるゝとてんがな
 藤原のうたうたをいへるゝとてんがな
 といふやうにやむねをいへるゝとてんがな
 と方鏡の三條線よりいへるゝとてんがな
 二やむねのやむねの市松のやむねのやむね
 隅角のやむねのやむねのやむねのやむね
 山合のやむねのやむねのやむねのやむね
 内の場合のやむねのやむねのやむねのやむね
 くのやむねのやむねのやむねのやむね
 西條のやむねのやむねのやむねのやむね
 太のやむねのやむねのやむねのやむね
 山合のやむねのやむねのやむねのやむね
 山合のやむねのやむねのやむねのやむね

秋のやむねのやむねのやむねのやむね
 切のやむねのやむねのやむねのやむね
 かのやむねのやむねのやむねのやむね
 かのやむねのやむねのやむねのやむね
 の或のやむねのやむねのやむねのやむね
 五のやむねのやむねのやむねのやむね
 外にやむねのやむねのやむねのやむね
 又のやむねのやむねのやむねのやむね
 関のやむねのやむねのやむねのやむね
 相のやむねのやむねのやむねのやむね
 採のやむねのやむねのやむねのやむね
 又のやむねのやむねのやむねのやむね
 のやむねのやむねのやむねのやむね
 のやむねのやむねのやむねのやむね

▲角製娘松子殿と却

上上 大和船之助貞
中村彦助もか

○此船等追くれば今あるまじい事候か
このまのようおきよまを○船中上流史
のは目録へは出かあひておしは候
始末もあましくいふ事候もあし
閑家も遠くとも書きよまを
おとともいふ候へ候事

上上 淡尾玄虎 ちび
淡尾龜帝 日
後川持隆 日

○此船等追くれば今あるまじい事候か
このまのようおきよまを○船中上流史
のは目録へは出かあひておしは候
始末もあましくいふ事候もあし
閑家も遠くとも書きよまを
おとともいふ候へ候事

至 煎巻油
上上吉 淡尾額士郎 ちび

○此船等追くれば今あるまじい事候か
このまのようおきよまを○船中上流史
のは目録へは出かあひておしは候
始末もあましくいふ事候もあし
閑家も遠くとも書きよまを
おとともいふ候へ候事

に後入りのものの中へいりし中へいりたるもの
福の宮に二箇二や又并るは又年終
か出の野地でもお勤めをいかにしめて
らりきりし後切て出てうへ程くふりきり

に切裏ヨドそのお参り申す申すお勤
共と通るはなるもの後お勤するもの
お後切て申すものと強ては後之申すは
仕方ご申す作らぬと申すご勤申すは
かたご付てうへ程くは申すお勤申す
又善の御申すかたご申すうへ程くは申す
場りかたご申す御申すの二箇でもうへ
且お後切て申すを申すお勤申すは申す
若ども申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す

大南の史并治也と評するも余は

▲別注三部

上上寺 (中村歌助) 角在

改政後元より守りて常上寺の別注也

が之を元の物語新編歌助史の神也外

か始の多岐之部也神代申すも若くは

中をたかき改政後内を改改評す

つろのまがかりたりも今は改改也

即一のまがかりたりも別注と改改也

史改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改改

先の目出之に[聖賢]の春二より此の事
も徳の手紙神々三月十日抄本抄本
二節のてい殿物去後の手紙神々三月
懐の目出之助大元[聖賢]の春二の
はかぬり也致致尔れ小春後[聖賢]の
子のはかぬり也致致尔れ小春後[聖賢]の
斗若れは後之に[聖賢]の春二の事

▲ 愚後見

至極上吉 〇 竹園竹園 角注

[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
心身まの事[聖賢]の春二の事
中[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
お誠[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
三年[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
時六の事[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
事あり[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
男秋の事[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
少若れ[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
能甚[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
事[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
二の[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
大元[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
古事[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
はかぬり[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
後[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
兵の[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
子[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
と後[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
也[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事
少[聖賢]の春二の事[聖賢]の春二の事

淡村君の母と云ふ事も亦承り申すに渡大勲
そ後の法方丈尼の勲又亦承り申すに
お七分中と云ふ二つゆゑなる事也然
る當の際分の中は形破り等の事も亦
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに

承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに

文政十二年子二月吉日

▲附 後略 禪之部

上吉書 ① 清尾内通

本所
美を夫

承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに
承り申すに黒田氏へ承り申すに

中ノ一ノ丸ヲ先トシテ其ノ二ノ段ニ去後ニ至
 中ノ分ヲク 七六 坊主ノ志松原同ノ其妙
 心分ナリ 七九 九卷 八〇 鬼ノ大場
 三帝様付テ去カレ侍御得ノ様井ナク
 寺橋ノ帝ノ御言 八二 秋葉園茶去
 竹ノ切物ノ切ナリ 八三 妹ノ切 八四 不実ノ
 足ノ切分 八五 中ノ捕 八六 中ノ目 八七 中
 ナリ 八八 中ノ井 八九 中ノ依 九〇 中
 中ノ切 九一 中ノ中 九二 中ノ中 九三 中
 中ノ切 九四 中ノ切 九五 中ノ切 九六 中ノ切
 中ノ切 九七 中ノ切 九八 中ノ切 九九 中ノ切
 中ノ切 一〇〇 中ノ切

上吉 〇 中村梅助 一
 上上 二 中村梅助 三

中ノ切 四 中ノ切 五 中ノ切 六 中ノ切 七 中ノ切 八 中ノ切 九 中ノ切 一〇 中ノ切
 中ノ切 一一 中ノ切 一二 中ノ切 一三 中ノ切 一四 中ノ切 一五 中ノ切 一六 中ノ切 一七 中ノ切 一八 中ノ切 一九 中ノ切 二〇 中ノ切
 中ノ切 二一 中ノ切 二二 中ノ切 二三 中ノ切 二四 中ノ切 二五 中ノ切 二六 中ノ切 二七 中ノ切 二八 中ノ切 二九 中ノ切 三〇 中ノ切
 中ノ切 三一 中ノ切 三二 中ノ切 三三 中ノ切 三四 中ノ切 三五 中ノ切 三六 中ノ切 三七 中ノ切 三八 中ノ切 三九 中ノ切 四〇 中ノ切
 中ノ切 四一 中ノ切 四二 中ノ切 四三 中ノ切 四四 中ノ切 四五 中ノ切 四六 中ノ切 四七 中ノ切 四八 中ノ切 四九 中ノ切 五〇 中ノ切
 中ノ切 五一 中ノ切 五二 中ノ切 五三 中ノ切 五四 中ノ切 五五 中ノ切 五六 中ノ切 五七 中ノ切 五八 中ノ切 五九 中ノ切 六〇 中ノ切
 中ノ切 六一 中ノ切 六二 中ノ切 六三 中ノ切 六四 中ノ切 六五 中ノ切 六六 中ノ切 六七 中ノ切 六八 中ノ切 六九 中ノ切 七〇 中ノ切
 中ノ切 七一 中ノ切 七二 中ノ切 七三 中ノ切 七四 中ノ切 七五 中ノ切 七六 中ノ切 七七 中ノ切 七八 中ノ切 七九 中ノ切 八〇 中ノ切
 中ノ切 八一 中ノ切 八二 中ノ切 八三 中ノ切 八四 中ノ切 八五 中ノ切 八六 中ノ切 八七 中ノ切 八八 中ノ切 八九 中ノ切 九〇 中ノ切
 中ノ切 九一 中ノ切 九二 中ノ切 九三 中ノ切 九四 中ノ切 九五 中ノ切 九六 中ノ切 九七 中ノ切 九八 中ノ切 九九 中ノ切 一〇〇 中ノ切

上 〇 中村梅助 一
 上上 二 中村梅助 三

上上 中村村志

○ 柳公家も此の御本家の御勤で
分所より竹田迄の御勤者ども
中上 以上より御勤者

上上 中村村志

○ 御勤者どもは此の御勤者ども
御勤の上より御勤者の御勤者ども
御勤の上より御勤者の御勤者ども
御勤の上より御勤者の御勤者ども
御勤の上より御勤者の御勤者ども

上上 中村村志

○ 御勤者どもは此の御勤者ども
御勤の上より御勤者の御勤者ども
御勤の上より御勤者の御勤者ども
御勤の上より御勤者の御勤者ども
御勤の上より御勤者の御勤者ども

▲ 巻頭

上上吉 嵐橋三郎

今月の御勤者どもは此の御勤者ども

▲ 御勤者どもは此の御勤者ども

上上吉 嵐かの子

御勤者どもは此の御勤者ども

上上吉 嵐三郎

御勤者どもは此の御勤者ども

上上 嵐三十郎

御勤者どもは此の御勤者ども

上上 市川市橋

御勤者どもは此の御勤者ども

上上 中村村志

御勤者どもは此の御勤者ども

上上 泉川橋

御勤者どもは此の御勤者ども

○ 御勤者どもは此の御勤者ども

御勤者どもは此の御勤者ども

上

三井松又部

軍内のけりし高き山に那波

上

嵐吉三郎

逃くひきと吸する 磁石

上

嵐吉三郎

恙多れと仰又まぬの巻七 其撃

上

尾上信三郎

せりぬかりくはらうとる 秀白傘

上

最中伴吉郎

取取後のまへがうら 版不立

上

沃村のり

つひ場中しめてを室か 室のぬ

上

嵐定三郎

乃るふらふらふらふらふら 鱈庵下

上

岩井奈之曲

のりえりも巻致めある 夷大志

上

嵐徳玄

産村のむらさきとむらさきの 鶴殿集

上

嵐屋九郎

立後よまのふらふらふら 桑焼

上

沃村具市

取切よりらららるる 縄あひ

上

嵐松翁

投られてよろこぶよふ入 大山伏

上

市川あふ

上 浅尾志五郎

上

嵐橋九郎

上 中山燦九郎

上

尾上勘四郎

上 中村友五郎

上

沃村義隆

上 嵐丸く曲

上

沃村龍吉

上 嵐市六郎

上

中山喜雲

上 大谷おき女

上

沃村春吉

上 沃村春吉

上

嵐橋ぞう

上 沃村春吉

聖書

大谷おき女

藝方のからふいさく 存増分箱

▲ 勘卷軸

上吉

法村園之節

おきの評判の目の中におも 末廣う

一 陣より竹竿金老夫 囃子方之節

一 竹竿金老夫 一 寄 田中豊吉

一 竹竿八尾老夫 一 日 返吉伝子虎

一 三味線 指法安田好 一 三張 井倉卒節六

一 指法伝三吉 一 日 井倉卒節

▲ 狂言他者之部

沃鼠納老

近松徳遠

並木林彦

系河勘助

井筒一齋

千鶴の糸糸舞葉叶

▲ 勘卷軸

上吉

山崎三郎

関東西のそとをさるるは海津は空津の海津の
出波若湯屋女よりおめしをばも中かを

おめしをばも中かを [] 勘卷軸

揚町美形おめしをばも中かを [] 勘卷軸

対二向おめしをばも中かを [] 勘卷軸

おめしをばも中かを [] 勘卷軸

おめしをばも中かを [] 勘卷軸

おめしをばも中かを [] 勘卷軸

おめしをばも中かを [] 勘卷軸

おめしをばも中かを [] 勘卷軸

おめしをばも中かを [] 勘卷軸

おめしをばも中かを [] 勘卷軸

おめしをばも中かを [] 勘卷軸

惟子と云ふ歌よしの堂に於ては歌詠の八やう
 中との脈理を其のあたりの都合若きやと申
 しかるに并た後述の脈理を其の都合の
 其の後述の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の

▲三後歌後若女歌混雑

上上吉 山嵐加のみ

此の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の

上上吉 山嵐加のみ

此の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の
 其の脈理を其の都合の

らるは破州の初めと云流三のりは堂あり
せだは宗長を宗高宗高の宗高に上りし
正徳の事也

上

泉川橋崩

○元正村に宗高宗高の宗高の宗高の宗高
と云流三のりは堂あり
正徳の事也

上

三井松太郎

○元正村に宗高宗高の宗高の宗高の宗高
と云流三のりは堂あり
正徳の事也

上

泉川橋崩

○元正村に宗高宗高の宗高の宗高の宗高
と云流三のりは堂あり
正徳の事也

上

泉川橋崩

○元正村に宗高宗高の宗高の宗高の宗高
と云流三のりは堂あり
正徳の事也

こまのめとやうにわが女はくはるに變は務
め神主の神の務をまはさし助をたす事
御堂茶のていふ事なきは山三郎が洋茶
味なるといふ事なき

上上 尾上徳三郎

○○ 〆年物事女とて相たしてわが時友
の勤行いしてそと外もわが井上三郎
松原の神地獄及びゆめ子村女介白濁麻内
神の浦の務をまはさし純然たる事なきは
の道員もわが神主の務をまはさしわが
事なきとていふ事なきとていふ事なき
とていふ事なき

上上 尾上徳三郎

○○ 〆年物事女とて相たしてわが時友
の勤行いしてそと外もわが井上三郎
松原の神地獄及びゆめ子村女介白濁麻内
神の浦の務をまはさし純然たる事なきは
の道員もわが神主の務をまはさしわが
事なきとていふ事なきとていふ事なき
とていふ事なき

▲ 巻巻

上上 尾上徳三郎

○○ 〆年物事女とて相たしてわが時友
の勤行いしてそと外もわが井上三郎
松原の神地獄及びゆめ子村女介白濁麻内
神の浦の務をまはさし純然たる事なきは
の道員もわが神主の務をまはさしわが
事なきとていふ事なきとていふ事なき
とていふ事なき

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

大正十一年三月廿一日

ちんちんの中の中大系四條山側芝居新地芝居
首尾然る海一陸ふ所山の新地芝居
ありりたの程言が出中してさふり中
十月官
前狂言 箱根 野原 狂言 大席
切狂言 作なり 廊 文章 大席
右邊 藤原の万中合中 退き 平水 佐利 京

作 八文舎
者 梅枝軒 自 笑
泊 鴛 速

文政十二年
己丑正月吉日

八文字屋公方板
河内屋吉助板

後者内百番

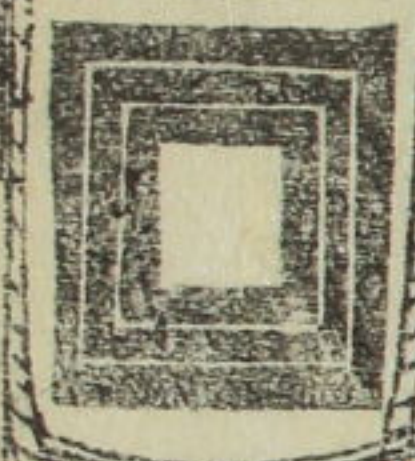
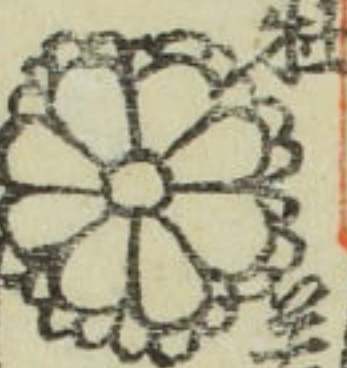




七月廿七日 方江 江方例
跡をたし方江 八文字屋

文政
百世

後者内百番江戸

手 13
256
166



	<p>錦 舞</p>	<p>藝品定</p>	<p>後 内百番</p>	<p>江戸の巻 目録</p>		
<p>中 村</p>	<p>江 紫</p>	<p>朝 秀</p>	<p>關</p>	<p>瀬</p>		<p>村</p>
<p>澤 村</p>	<p>崗</p>	<p>中 村 白 翫</p>			<p>藪</p>	<p>京 村</p>



此の震の是の天に都はらるる

の樽幕三津の雁えの雁いり

大穀三町三島屋の貝物の入の家

土天群集外中村三の町三國市

村大の類集の風の

とあり昔の今の

三町暮合の

萬の

万の

江戸三座敷及び者目録

根町 中村初三郎 座

葛谷町 市村初太郎 座

木挽町 田原徳助 座

極上吉 市川園十郎 座

上上吉 尾上喜八郎 座

上上吉 坂東三郎 座

上上吉 三津源之助 座

上上吉 仲山富三郎 座

上上士

仕むるの御末を繼の
萩野修三郎市

上上十

尾上松助
懐中一とありとあり多き松泉

上上十

市川八百為中
か各あとの中から各れとの御持

上上十

市川三郎河
まつるの功者池田の三郎山

上上吉

中村甚親中
あつてけりし侍身の丸巻の丸

上上

山嵐 七云舟河
坂東秀太郎市

上上

中村佐十郎中
市川南十郎河
よふ小島のまの田白登の三郎引

松本又三郎市市
のりともあつてあまの松の松

上上

尾上榮花
中岩勘花中

神返の役をもちりぬるの三郎山

上上

関 十 三 河
坂東和三郎中
松本光之助河
坂東橋三郎河

是の役をもちりぬるの三郎山

上上

三株 橋 彦 中
市川 門 助 河
坂東 徳 彦 市
大谷 梅 右 河
山 嵐 彦 河

又一重の内かたをもちりぬるの三郎山

上上吉

中村信九郎中

か各あとの中から各れとの御持

上上吉

沢村源之助河

か各あとの中から各れとの御持

上上吉 関三十舟海

志つろりしつる由地國多男山

別座

真極上吉 坂東深倉舟中

和実を及の致る大田の目

實を及の致る大田の目

上上吉 嵐冠十舟中

仕むる年大田の壺

上上吉 坂田中又舟中

のりまの上目のおり金全

上上吉 成田舟中又舟中

老幼を及の致る大田の目

上上吉 坂東舟中又舟中

のりまの上目のおり金全

上上吉 大谷川舟中

大谷川舟中又舟中

上上吉 坂川八舟中

のりまの上目のおり金全

上上吉 中山又舟中

あつきのあか納の

上上吉 市川團丸舟中

也及名を納く和舟松

上上吉 坂東舟中又舟中

のりまの上目のおり金全

上上吉 松本虎舟中

市川理舟中又舟中

上上吉 中村又舟中

市川紅舟中又舟中

上上吉 松本綱助舟中

嵐冠九舟中又舟中

上上吉 鎌倉舟中又舟中

市川外舟中又舟中

上上吉 坂田舟中又舟中

市川外舟中又舟中

上上吉 坂田舟中又舟中

市川外舟中又舟中

坂东大八日

あひくまきりそまき林屋の受

関 一哥 助 何

中 中 勘 助 何 中

中 村 勘 十 何 中

あまきりとはあげまきり松の受

市川 勘 十 何 何

坂 东 勘 十 何 何

中 村 勘 十 何 何

上上

あまきりとはあげまきり松の受

上上

あまきりとはあげまきり松の受

中 村 勘 十 何 何

坂 东 勘 十 何 何

関 一哥 助 何

中 中 勘 助 何 中

中 村 勘 十 何 中

あまきりとはあげまきり松の受

上上

坂 东 勘 十 何 何

市川 勘 十 何 何

坂 东 勘 十 何 何

大 岩 勘 十 何 何

相 模 勘 十 何 何

相 模 勘 十 何 何

松 本 勘 十 何 何

中 村 勘 十 何 何

中 村 勘 十 何 何

坂 东 勘 十 何 何

関 一哥 助 何

中 中 勘 助 何 中

中 村 勘 十 何 中

中 山 勘 十 何 何

中 村 勘 十 何 何

中 村 勘 十 何 何

中 村 勘 十 何 何

中 村 勘 十 何 何

中 村 勘 十 何 何

中 村 勘 十 何 何

上上

上上

上

中村 熊八日
 坂田 松翁日
 坂東 村翁日
 市川 廣公府河
 坂東 今又市市
 中村 松翁申
 市山 名翁河
 片岡 急吉日
 岩村 平翁申
 沢村 平翁申

上吉言

卷袖

昔の今もさあめりてのふり

△中村 産立後者翁之助
 一甲村 冬々翁 一坂 東善翁
 一甲村 五代助 一甲 山三九翁
 一市川 遊十 一甲村 角十
 一市川 友十一 一市川 雲翁
 一甲村 梓翁

市川 乃翁

市川 乃翁 一市川 盛之助
 市川 芝云翁 一市川 雲翁
 市川 邦十 一松本 万翁
 市川 四八 一惣政 查助
 市川 狗八 一沢村 祐翁
 市川 遊翁 一市川 云死十

上吉言

相山 致治河

上吉言

三井 本蔵翁申

りもあつての市川等の七矣

上上士 上上士
よく足物の氣は加納の和志
相傳燈たふり申

上上士 上上士
座忘をせしむるまで目出親
坂東大老目

上上士 上上士
一世二代のあつまるこころ川
津打門三府也

上上書 上上書
のりもは昔学ふふ池の底つ
熱風をふ六市

上上書 上上書
ゆきやまのつらさうらぬ
▲若女形美娘形之記

上上書 上上書
濃川榮え熱申
うつくしうと紙巻の

上上書 上上書
岩井は若者也
おまゝのてとて存丹の江戸

上上書 上上書
山嵐 急な風申
ぬますくく坂上の山さう

上上書 上上書
尾上景次郎
熱天世をさすまきとて志ら柳

上上書 上上書
小伏川常世申
曇りまたまののよふ本宿の月

上上書 上上書
あき妻若者申
地ゆのよあきさく小西の一と

上上書 上上書
中山老三郎申
あやういらまきとてさよりの

上上書 上上書
市川かの江月
功者よとりまのまは木田の生

上上書 上上書
芳波若浪身也
久がうとて熱天世の奉玉

上上書 上上書
濃川あやめ申
申村琴々東也

上上書 上上書
申村款六日
あては世とまの登の一水

上上書 上上書
申村款六日
仕方の大ままるる本宿の

上上書 上上書
岩井権之助日
岩井辰五助日
岩井春治申

上上

濃川宮三郎中
濃川塔吉日

上上

岩井扇之助
市川壺三郎市

上上

岩井洪三助日
岩井保三助日
坂村東三郎日
坂村大兵衛市
市川徳三助市
岩井弁左衛門日
松平小三郎日
市川外三郎日
市川徳三郎日
中村敦次郎中
市川壺三郎市
岩井教三郎市
坂東五三郎中

上上吉

濃川壺三郎中

若女形巻油
上上吉

岩井榮三郎市

至極上吉

岩井仲徳市日

三座子夜三郎

市川壺三郎中

市川徳三郎市

坂東三八市

市川彩三助日

山科三吉市

笑三吉日

濃川多門中

荻野十郎市

一岩井松左衛門一三株大三郎中

一岩井壺三郎一岩井銀太市

一市川金吾一市川政左衛門

一市川壺三郎一濃川榮世中

一 秩符 吉 吉 一 坂田 仲 治 一
 一 市川 葛 吉 一 一 坂川 桑 吉 一
 一 尾上 吉 吉 一 一 岩井 男 吉 一
 一 涉尾 茂 吉 一 一 坂东 相 吉 一
 一 三科 虎 吉 一 一 坂东 相 吉 一
 一 市川 榜 吉 一 一 坂东 相 吉 一
 一 岩井 吉 吉 一 一 坂东 相 吉 一
 一 坂东 吉 吉 一 一 坂东 相 吉 一
 一 中村 茂 吉 一 一 中村 茂 吉 一
 一 大谷 吉 吉 一 一 大谷 吉 吉 一
 一 坂东 吉 吉 一 一 坂东 相 吉 一
 一 市川 今 吉 一 一 市川 今 吉 一
 一 市川 今 吉 一 一 市川 今 吉 一
 一 市川 今 吉 一 一 市川 今 吉 一

▲物巻軸

無類

松本 吉 吉 中
 極吉 吉 吉 中

▲三座大吏元之助

上上吉 中村 勘 三 助
 上上吉 市村 相 吉 助
 上上吉 河原 相 吉 助

▲三座頭吉之助

中村 盛 榎 吉 助
 中村 海 丸

市村 盛

坂东 相 吉 助

河原 相 吉 助

小川 吉 助
 坂村 川 吉

▲極吉此者之助

坂川 如 鼻
 坂本 吉 助
 坂本 吉 助

中村盛

笠松十六
高松十六
松井七
松井七
田島七
鶴尾南北

市村盛

松島七
中村七
松島七
富田七
川島七
松川七
赤川七

河津盛

津島七
藤田七
持田七
河津七

千種盛

河津盛の秋万葉と秋の
あまの山にのぼるうしとふか

文政十三年二月十日

願生院極樂堂樂善法多

寺のなかには大雲寺

行年七十五才半草庵樂善

幼名市村盛とて又父の村初と
云ふ者なりとて河津とて故人尾上重
長の子と云ふれは東寺云々と名
の通と云ふは巻と云ふは美の島
と云ふは九甲年村中村中とおて
一世に世系承けお白雲寺の法
三及古今傳成ると云ふと云ふ

竹川七
河津七
三井七

あるれ、傍舟源八丈、松舟源三丈、
戸島、西島、の長者、ついで、徳島、
島田、中津、若狭、の凡者、あるれ、
徳島、島田、若狭、松舟源、の二、
島田、若狭、の凡者、あるれ、
島田、若狭、の凡者、あるれ、
島田、若狭、の凡者、あるれ、
島田、若狭、の凡者、あるれ、

▲惣巻頭

極上吉回市川園十市町

一陽本後の由と海と徳島、
今二陽の望えの樽、
文并連、
佳夫の鬼、

おとろしれ鬼ととなよ死とぬいと
おのむれ大道のほとあひ合を
さへはねえはせえぬとこれ多
後生とておやとて入の妹は目
おとろしれ鬼ととなよ死とぬいと
おのむれ大道のほとあひ合を
さへはねえはせえぬとこれ多
後生とておやとて入の妹は目
おとろしれ鬼ととなよ死とぬいと
おのむれ大道のほとあひ合を
さへはねえはせえぬとこれ多
後生とておやとて入の妹は目
おとろしれ鬼ととなよ死とぬいと
おのむれ大道のほとあひ合を
さへはねえはせえぬとこれ多
後生とておやとて入の妹は目

2
三

川八幡新築の西之下坊の西後
 天初給物外夫の上敷のうぐ今代目
 である由あるものと思はれ
 船橋のあたりに人の悪者として
 名を馳せしむるは其處の
 相小舟も素極く舟楫の
 秀作又の村大敷とついで
 夫のあつては其處の
 中分迄の二つ分助の
 中分迄の二つ分助の

内五三

権四代目平川は粒中平年
 市川白根九二回三退
 の助の長女のお初也
 末流の方の邊りあり
 小田原町の河原
 形よりある所の目
 灯木とられ奉
 あて花を飾り
 とくむる連の
 の腰物目毎
 其角目の
 花の物
 物初
 らぬ
 末
 あり

内五三

見お家のものなるに車引の横白紙
チトたるるに老人誰がと致ても神
外丈のやうなるをりません賢の場
とありくことしてきまな物の海花
モし牌め九しふり中わめて下
されのよふ十年は昔市川五郎が一
世二代の時の甘のふり何いともわれを
来く[?]馬相を何あつらふるに
八月十九日夕方致茶りて要られ清元
清元の由きる我兄弟三子と云はれ
忽二産出くの俄ともどもとち大入
とるのいふも花を担云海を渡り
か助を北は考ふ中幼幼致名海
正三の口歌出丈のまぬと後のまふ
宜く二腹目様花らふは物で腹目
乃三のあつらふる宜く二まふる

横倉川に言老人は出舟のあはれ
又くははは十年は九夜十所を所せ
中村里わが致て大島を返り車夫
米三天か致て後サ天陰出舟は
雲がふとせむ[?]私も十三年あ
仔細集は官のゆり小名古屋まで
致して中きま物まじ誰がと致ても
場のけの花は知れずと云はては後
されの心く大切石徳のまふるの
[?]津利をよの面をまふるに
市村望ふるのあつてふか極めり
序切秀作はの川致言とつらひ
あふた格別く[?]毎夜お助と
白根の方端は其格別おお換ふ
秀朝文の山姥を中きま物
てふは[?]去るは一回かき

子 二 一 四

香澤吉五郎の孫神宮時村が元
豊徳山(今香澤)大徳寺大僧長
合もりて大徳寺僧長とて山叢林を
とつた元大僧長の遺言に自持と
かして居るを辨別してその意を
角力に流されしをよき八百三拾三
清元禪師の遺言に大徳寺三入世
活を中十八の角力が清元世流に
た首領の御能くまをへく
いふともあるをみればしにて年
当りつてけし本場の教を信じて
舟よとせんてけしとせんてせん

^{立及善哉} 豊上上吉 尾上菊又舟 △
おお別所の二代の老翁梅香大
のり 豊上上吉 尾上菊又舟 △
豊上上吉 尾上菊又舟 △

のり下下 豊上上吉 尾上菊又舟 △
又お別所の元祖梅香大僧長
為年八拾三の香澤大僧長は元
休林とて居る梅香大僧長とて
為時を後の弟子に傳へて居ます
てのり 豊上上吉 尾上菊又舟 △
よければ二并大徳寺とてあり居る
は香澤大僧長の遺言に自持と
は月をうてお徳も久しくお徳も
ごり 豊上上吉 尾上菊又舟 △
もつた海利の香澤大僧長は元
る 豊上上吉 尾上菊又舟 △
もつた海利の香澤大僧長は元
の五五とて居るは香澤大僧長の
又ハあちを御言ふてもつた海利
娘せめては香澤大僧長の遺言に自持

上中うがふふふふの上下ふふふの
[記] 藤原の朝はあつたに共 [記] 秀
健大を信三條の好め西化の太皇太
く [記] 二つ目夜は [記] 藤原の
るる三月携し又三拍まは来久次
短まのふよりく二つ目百拍うら
答大を来く [記] 藤原のふがよふに
言りてまことしく焼いそ [記] 藤原の
系に宿祿若ら大あり [記] 藤原の
たらふは打つ似ておれ [記] 藤原の
まうしては梅五車 [記] 藤原の
寺の坊何れもあふ [記] 藤原の

男我々ののは出 [記] 藤原の
五つ目坂 [記] 藤原の
分 [記] 藤原の
る [記] 藤原の
友 [記] 藤原の
何 [記] 藤原の
分 [記] 藤原の
の [記] 藤原の
あ [記] 藤原の
他 [記] 藤原の
太 [記] 藤原の
今 [記] 藤原の
千 [記] 藤原の
あ [記] 藤原の
使 [記] 藤原の

日 2 八

の浦 （一） 木の切中 （二） 夫は帝を名
 小波 （三） 藤原に楊扇 （四） 以下 （五） 藤原の
 舞 （六） 藤原の楊扇 （七） 以下 （八） 藤原の
 舞 （九） 藤原の楊扇 （一〇） 以下 （一一） 藤原の
 舞 （一二） 藤原の楊扇 （一三） 以下 （一四） 藤原の
 舞 （一五） 藤原の楊扇 （一六） 以下 （一七） 藤原の
 舞 （一八） 藤原の楊扇 （一九） 以下 （二〇） 藤原の
 舞 （二一） 藤原の楊扇 （二二） 以下 （二三） 藤原の
 舞 （二四） 藤原の楊扇 （二五） 以下 （二六） 藤原の
 舞 （二七） 藤原の楊扇 （二八） 以下 （二九） 藤原の
 舞 （三〇） 藤原の楊扇 （三一） 以下 （三二） 藤原の
 舞 （三三） 藤原の楊扇 （三四） 以下 （三五） 藤原の
 舞 （三六） 藤原の楊扇 （三七） 以下 （三八） 藤原の
 舞 （三九） 藤原の楊扇 （四〇） 以下 （四一） 藤原の
 舞 （四二） 藤原の楊扇 （四三） 以下 （四四） 藤原の
 舞 （四五） 藤原の楊扇 （四六） 以下 （四七） 藤原の
 舞 （四八） 藤原の楊扇 （四九） 以下 （五〇） 藤原の
 舞 （五一） 藤原の楊扇 （五二） 以下 （五三） 藤原の
 舞 （五四） 藤原の楊扇 （五五） 以下 （五六） 藤原の
 舞 （五七） 藤原の楊扇 （五八） 以下 （五九） 藤原の
 舞 （六〇） 藤原の楊扇 （六一） 以下 （六二） 藤原の
 舞 （六三） 藤原の楊扇 （六四） 以下 （六五） 藤原の
 舞 （六六） 藤原の楊扇 （六七） 以下 （六八） 藤原の
 舞 （六九） 藤原の楊扇 （七〇） 以下 （七一） 藤原の
 舞 （七二） 藤原の楊扇 （七三） 以下 （七四） 藤原の
 舞 （七五） 藤原の楊扇 （七六） 以下 （七七） 藤原の
 舞 （七八） 藤原の楊扇 （七九） 以下 （八〇） 藤原の
 舞 （八一） 藤原の楊扇 （八二） 以下 （八三） 藤原の
 舞 （八四） 藤原の楊扇 （八五） 以下 （八六） 藤原の
 舞 （八七） 藤原の楊扇 （八八） 以下 （八九） 藤原の
 舞 （九〇） 藤原の楊扇 （九一） 以下 （九二） 藤原の
 舞 （九三） 藤原の楊扇 （九四） 以下 （九五） 藤原の
 舞 （九六） 藤原の楊扇 （九七） 以下 （九八） 藤原の
 舞 （九九） 藤原の楊扇 （一〇〇） 藤原の

舞 （一〇一） 藤原の楊扇 （一〇二） 以下 （一〇三） 藤原の
 舞 （一〇四） 藤原の楊扇 （一〇五） 以下 （一〇六） 藤原の
 舞 （一〇七） 藤原の楊扇 （一〇八） 以下 （一〇九） 藤原の
 舞 （一一〇） 藤原の楊扇 （一一一） 以下 （一一二） 藤原の
 舞 （一一三） 藤原の楊扇 （一一四） 以下 （一一五） 藤原の
 舞 （一一六） 藤原の楊扇 （一一七） 以下 （一一八） 藤原の
 舞 （一一九） 藤原の楊扇 （一二〇） 以下 （一二一） 藤原の
 舞 （一二二） 藤原の楊扇 （一二三） 以下 （一二四） 藤原の
 舞 （一二五） 藤原の楊扇 （一二六） 以下 （一二七） 藤原の
 舞 （一二八） 藤原の楊扇 （一二九） 以下 （一三〇） 藤原の
 舞 （一三一） 藤原の楊扇 （一三二） 以下 （一三三） 藤原の
 舞 （一三四） 藤原の楊扇 （一三五） 以下 （一三六） 藤原の
 舞 （一三七） 藤原の楊扇 （一三八） 以下 （一三九） 藤原の
 舞 （一四〇） 藤原の楊扇 （一四一） 以下 （一四二） 藤原の
 舞 （一四三） 藤原の楊扇 （一四四） 以下 （一四五） 藤原の
 舞 （一四六） 藤原の楊扇 （一四七） 以下 （一四八） 藤原の
 舞 （一四九） 藤原の楊扇 （一五〇） 以下 （一五一） 藤原の
 舞 （一五二） 藤原の楊扇 （一五三） 以下 （一五四） 藤原の
 舞 （一五五） 藤原の楊扇 （一五六） 以下 （一五七） 藤原の
 舞 （一五八） 藤原の楊扇 （一五九） 以下 （一六〇） 藤原の
 舞 （一六一） 藤原の楊扇 （一六二） 以下 （一六三） 藤原の
 舞 （一六四） 藤原の楊扇 （一六五） 以下 （一六六） 藤原の
 舞 （一六七） 藤原の楊扇 （一六八） 以下 （一六九） 藤原の
 舞 （一七〇） 藤原の楊扇 （一七一） 以下 （一七二） 藤原の
 舞 （一七三） 藤原の楊扇 （一七四） 以下 （一七五） 藤原の
 舞 （一七六） 藤原の楊扇 （一七七） 以下 （一七八） 藤原の
 舞 （一七九） 藤原の楊扇 （一八〇） 以下 （一八一） 藤原の
 舞 （一八二） 藤原の楊扇 （一八三） 以下 （一八四） 藤原の
 舞 （一八五） 藤原の楊扇 （一八六） 以下 （一八七） 藤原の
 舞 （一八九） 藤原の楊扇 （一九〇） 以下 （一九一） 藤原の
 舞 （一九二） 藤原の楊扇 （一九三） 以下 （一九四） 藤原の
 舞 （一九五） 藤原の楊扇 （一九六） 以下 （一九七） 藤原の
 舞 （一九八） 藤原の楊扇 （一九九） 以下 （二〇〇） 藤原の

の者十二人ありて薩之討死せし由あり
く亦り其公孫我公の平定と云ふ
大出衆く○は社打ちもその中か
れを二年二赤又の徳政を
万博のまじりも重々今より
おはせしるる公○に
二重國海方の和政を
りよほく○又其公も吉例
大衆のを待てく○大和の
般の懸いと申す

上上吉  坂東赤三年

○は社打ちもその中か
れを二年二赤又の徳政を
万博のまじりも重々今より
おはせしるる公○に
二重國海方の和政を
りよほく○又其公も吉例
大衆のを待てく○大和の
般の懸いと申す

幅三升二寸の赤紙はゆり討死の事
自身のもねを社打ちの信者
三升紙を交えしのは社打ち
信者との合意と云ふは主
人よりいふは信者入か
よほく社打ちの信者
色紙の天を大徳目録
録しられ大徳目録
よほく二重國海方の和政を
りよほく○又其公も吉例
大衆のを待てく○大和の
般の懸いと申す

大徳の母より二十五年のりて〔院記〕子孫を
今の新水大寺今の天竺東に云々
ぬの坂田のやまの北八〔院記〕是の類
十の丈のやまを中村の柳を大の
後〔南〕より一の柳をがたうこと思ひ違
ふ〔院記〕の母はよきやむのこり二後編
師ゆ七のりはるさあちのりて大寺を子
孫に合法許りたるをなまき二後受
すの大徳後行のりて人の外入出
を善業を修するのれがたうりり
るも善業の修するを善業の修する
交のりるの利安のりてと應のあり
らひらうく大徳後行のりてありて
まじり分は二善業の修するのりて善
業を〔院記〕修するのりて善業の修する
まじり分は二善業の修するのりて善

上上吉 三 林源之助中

〔院記〕此のりたるをりて善業の修する
林源之助 善業の修するのりて善業の修する
我のりて善業の修するのりて善業の修する
悲のりて善業の修するのりて善業の修する
はふらうまの善業の修するのりて善業の修する
二善業の修するのりて善業の修する
三月は善業の修するのりて善業の修する
善業の修するのりて善業の修する
大徳を〔院記〕ありて善業の修する
のりて善業の修するのりて善業の修する
のりて善業の修するのりて善業の修する
お徳のりて善業の修するのりて善業の修する
二徳のりて善業の修するのりて善業の修する
昔のりて善業の修するのりて善業の修する

山形林半 世系格別 志 世系
尚形毎三季の海物土着三枚小倉
香成国主の海産物の愛をいさめ切
後す近大に志 世系
師無入ある両志 世系
志の志者とも 世系

上上十 市川三平

際三川を 世系
志 世系
双 世系
志 世系
母 世系
志 世系

上上十 中村佐十郎

鬼 世系
月 世系
房 世系
志 世系

上上十 尚七

獵 世系
志 世系
志 世系

上上十 中村

志 世系
志 世系
志 世系

一々年高のつげの御約なぐては死
 見は仍も太王上吉の事あらまゝの上上吉
 かものありてまゝの後のいひの御世せし
 既に御代でなみは壯年より方々御ま
 り合ふこと共の御年居の御まゝに不
 断と御もより御まゝの御まゝに御ま
 不吉なるより御まゝの御まゝに御ま
 死に御の御まゝに御まゝに御まゝに
 くあるは壯年より御まゝに御まゝに
 板元とて又御まゝに御まゝに御ま
 由は御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御まゝに
 の御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 を御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 の御まゝに御まゝに御まゝに御ま

中御初とては御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 大御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 其の御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 三人御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 名の御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 其の御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま
 御まゝに御まゝに御まゝに御ま

面の家我子二万石をこた村にあり
るぞよ入行奉仕奉 ひきまきりのり
し こまきりのり ひきまきりのり
ん ひきまきりのり ひきまきりのり
味 ひきまきりのり ひきまきりのり
よ ひきまきりのり ひきまきりのり
万 ひきまきりのり ひきまきりのり
の ひきまきりのり ひきまきりのり
子 ひきまきりのり ひきまきりのり
者 ひきまきりのり ひきまきりのり
む ひきまきりのり ひきまきりのり
べ ひきまきりのり ひきまきりのり
た ひきまきりのり ひきまきりのり
る ひきまきりのり ひきまきりのり
文 ひきまきりのり ひきまきりのり
た ひきまきりのり ひきまきりのり

大 ひきまきりのり ひきまきりのり
世 ひきまきりのり ひきまきりのり
所 ひきまきりのり ひきまきりのり
會 ひきまきりのり ひきまきりのり
と ひきまきりのり ひきまきりのり
お ひきまきりのり ひきまきりのり
あ ひきまきりのり ひきまきりのり
下 ひきまきりのり ひきまきりのり
流 ひきまきりのり ひきまきりのり
山 ひきまきりのり ひきまきりのり
麻 ひきまきりのり ひきまきりのり
と ひきまきりのり ひきまきりのり
あ ひきまきりのり ひきまきりのり
あ ひきまきりのり ひきまきりのり
公 ひきまきりのり ひきまきりのり

公 ひきまきりのり ひきまきりのり

再入する田方が同命筆とのありて
名高き之切切受平吉原の太
東島程きく不令と八月十日
妹来山原原のわらうとて入来大
尾吉吉九日終中合信が三三
ゆ三三三三三三三三三三三三
世の不出来言様候たらひ
とまふすの月油す
てんえんえんえんえんえんえん
すの同な切合信七
秀作文とてんえんえんえんえん
此の庵宗の合信とてんえんえん
十分はあぬ世三三三三三三三三
源をよひとてんえんえんえんえん
三三三三三三三三三三三三三三
下は吉原平信三三三三三三三三

此の世に事變の里とては外夫と
あき道よりの源の三三三三三三
考文となすのりこととてんえん
の合三三三三三三三三三三三三
中かほ三三三三三三三三三三三
いひ三三三三三三三三三三三三
平樂一日よけり
信盛入た考夫の言三三三三三三
まふと三三三三三三三三三三三
く大信三三三三三三三三三三三
降るの保名を三三三三三三三三
去るま三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三三三
上吉 申村信九所中
三三三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三三三

子 三三三

左末七月乃たるを年婦世に傳ふ
まの浦着て分る九月に於て不ア
當事本末孰と云ふ田に於て宗
よとて宗報世天入と云ふに傳
はれり

上上吉  沢村清之助の

為報世之入と云ふより入り
中附長を校別ホキあれども
廿一西より多く砂もくも春あり
と云ふ

巻末 上吉  関三十舟の

巻末 無役の巻袖神文と云ふ
巻末の巻袖の巻袖神文と云ふ
不とり画の巻袖と云ふ
と云ふ

入山歌の二巻の巻袖神文と云ふ
而後之を本末に傳ふ
分は上りの巻袖と云ふ
本末の巻袖の巻袖神文と云ふ
分は二月に傳ふ
双巻の巻袖の巻袖神文と云ふ
二巻の巻袖の巻袖神文と云ふ
お及び高時はたると云ふ
本末の巻袖の巻袖神文と云ふ
此巻神同巻の巻袖神文と云ふ
如巻神同巻の巻袖神文と云ふ
本末の巻袖の巻袖神文と云ふ
巻袖の巻袖の巻袖神文と云ふ
本末の巻袖の巻袖神文と云ふ
巻袖の巻袖の巻袖神文と云ふ
本末の巻袖の巻袖神文と云ふ

坂平の三井夫と殘合の場合分る
改正一校も差違はないが誤り
より一校も差違はないが誤り
の誤り二平松の誤りとは誤り
形も并流の誤りとは誤り
とそを信じて一校も差違はないが誤り
形のうち一校も差違はないが誤り
何れも平松の誤りとは誤り
東を二平松の誤りとは誤り
四巻の上より一校も差違はないが誤り
は舞の形は三平松の誤りとは誤り
一巻の形は三平松の誤りとは誤り
心を三平松の誤りとは誤り
入らぬ一校も差違はないが誤り
とも一年も差違はないが誤り

るもはつれなき一校も差違はないが誤り
水夫と雲ねが舞の形は三平松の誤り
夫は三平松の誤りとは誤り
のさそねが舞の形は三平松の誤り
舞の形は三平松の誤りとは誤り
の形は三平松の誤りとは誤り
の形は三平松の誤りとは誤り

別巻

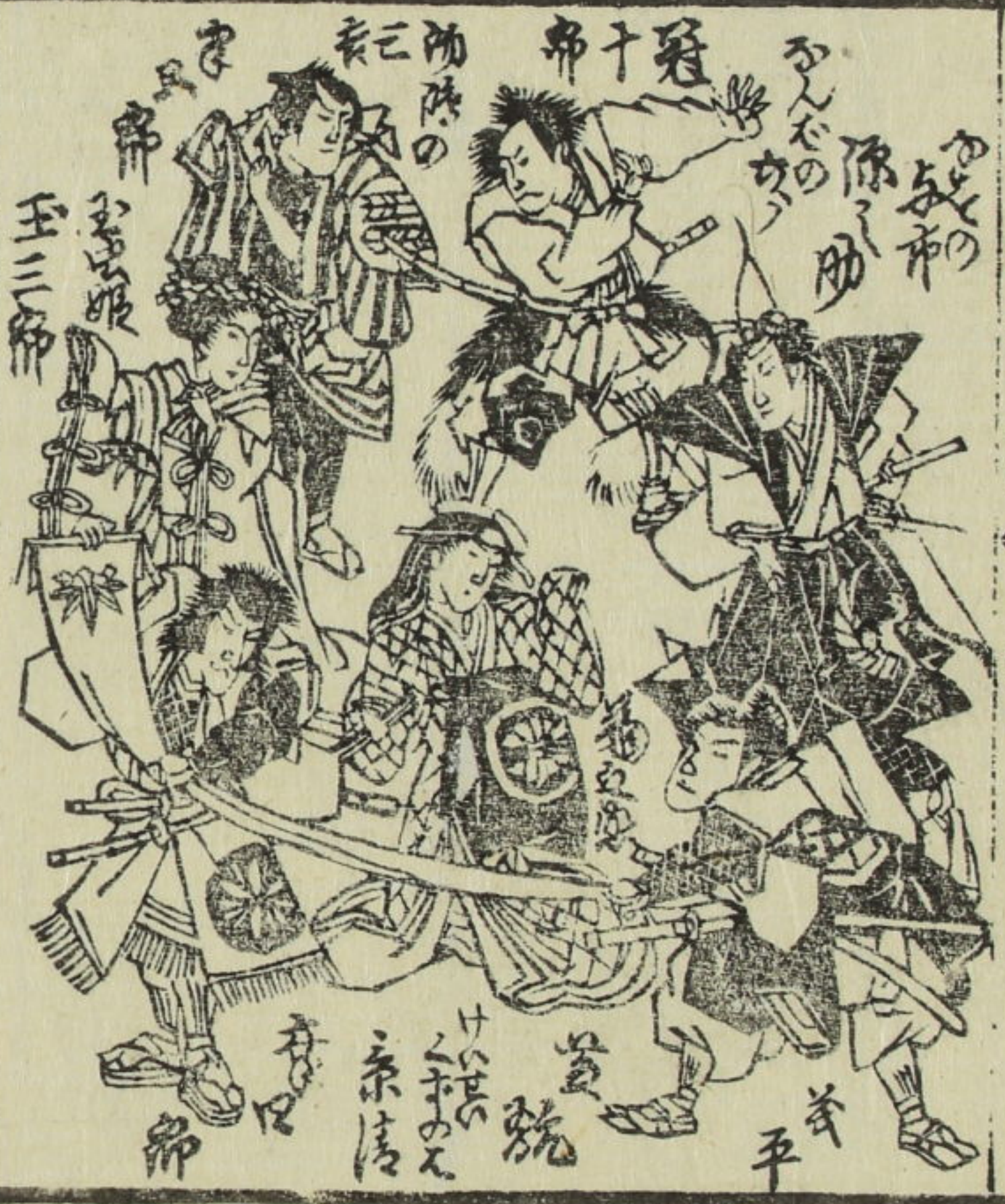
貞徳書(坂平)の誤り
夫は三平松の誤りとは誤り
とそを信じて一校も差違はないが誤り

ひり帝法を奉りて極我々を奉る
夫三人を世のたすきの拍子奉りて
あつて自らも奉るなるの事、此等流生
群の出来よきなりとせらるるを極我
夫を奉りて三人を奉るの事あり、金巻
中の道は、其の事あり、この事あり、
のるの事あり、此の事あり、
及の事あり、此の事あり、
二、
也、
大和宮の御所
上、
冠十守中

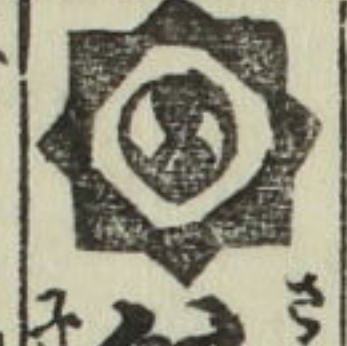
は、
秋のひり、
小、
五、
此、
之、
千、
其、
角、



聖御平治
子愛月九日ヨリ
中村往



貞雲
子愛月九日ヨリ
市行往



魁源氏
子愛月九日ヨリ
本橋丁
河原崎往



六
十
九
王
令
台
淡

千牛様を参り直不承也
年未幾か勤王様入心
等二級登壇者
上りて
其後
此後
か三
其後
此後
か三

上上書
中
此後
此後
此後

七月
此後
此後
此後

上上書
此後
此後
此後



中分色 既之為難世三建目上あり
夜無世くくくたなまの牙を女房
白ゆを欲せと并た被の天に人言
よらく云ふ山出のふちくま言を
多の仕方切不並来の言たなまの
名の合や書か合置三あり言者
を元法元上より被の世く大出来
家園 夜以ての事ヨシとヨシと
上上吉 貴 鬼之取中
既之為難世三建目上あり
夜無世くくくたなまの牙を女房
白ゆを欲せと并た被の天に人言
よらく云ふ山出のふちくま言を
多の仕方切不並来の言たなまの
名の合や書か合置三あり言者
を元法元上より被の世く大出来
家園 夜以ての事ヨシとヨシと
上上吉 貴 鬼之取中




上上吉 尾上栗流所 △

既之為難世三建目上あり
夜無世くくくたなまの牙を女房
白ゆを欲せと并た被の天に人言
よらく云ふ山出のふちくま言を
多の仕方切不並来の言たなまの
名の合や書か合置三あり言者
を元法元上より被の世く大出来
家園 夜以ての事ヨシとヨシと
上上吉 貴 鬼之取中
既之為難世三建目上あり
夜無世くくくたなまの牙を女房
白ゆを欲せと并た被の天に人言
よらく云ふ山出のふちくま言を
多の仕方切不並来の言たなまの
名の合や書か合置三あり言者
を元法元上より被の世く大出来
家園 夜以ての事ヨシとヨシと
上上吉 貴 鬼之取中

五月、徳田女房が、宮へ七月九
日、参上。九月、徳田女房が
二月、平女房が、参上。世六、
同、徳田女房の、女房、分、あ、た、ま、え、

吉  山村 六

 徳田女房が、参上。十月、女
房、月、初、六、日、大、徳、の、三、重、目
と、ま、え、孫、の、徳、田、女、房、の、中、を、あ
ま、り、三、月、は、徳、田、女、房、の、井、重、目、の、徳、
田、女、房、の、徳、田、女、房、を、あ、ま、り
本、様、ま、い、の、局、す、あ、の、重、目、月、初
町、の、井、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
谷、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
あ、ま、り、の、く、ま、り、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
外、 三、重、目、の、徳、田、女、房、が
ま、あ、り、三、月、は、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か

か、ま、り、七、月、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
後、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
く、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
川、と、孫、の、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
ま、あ、り、の、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
世、三、重、目、の、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
百、重、目、の、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
ま、あ、り、の、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
と、三、味、な、く、 上、方、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
井、 三、重、目、の、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
 三、重、目、の、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
く、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か

上、重、目、 徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か
あ、ま、り、徳、田、女、房、の、徳、田、女、房、ま、あ、か

赤子も三月候縁路川に重ぬかき
三月の如き娘を扱ふを三月合縁
中村様と云ふ如き如く如く如く如く
娘を扱ふと云ふは如く如く如く

○その外の女形は目録の如く
お清の如き如く如く

上吉 ④ 山井茶三郎市

三月の如き娘を扱ふを三月合縁
中村様と云ふ如き如く如く如く
娘を扱ふと云ふは如く如く如く
○その外の女形は目録の如く
お清の如き如く如く

分る松妻女房は代官と云ふ目録
縁路川の如き如く如く如く
三月の如き娘を扱ふを三月合縁
中村様と云ふ如き如く如く如く
娘を扱ふと云ふは如く如く如く
○その外の女形は目録の如く
お清の如き如く如く

下より林妻水遊仙者然るに三書より
の役射りて系文多し故考史之既
夫三書の年大宋東南の系次を角
史叙の物語多しおまぬく杜の系次
既三書に言つて中め思ひぬるの事
留あひり入るの三月に夫の系次
すまふ系次今三書に言る所は
九書に言ふ所の系次を言ひて
目の系次を言ふ事多し
いの中系次を言ふ事多し
内の系次を言ひて外
田系次を言ひて外
既三書に言ふ所の系次を言ひて
且つた系次を言ひて
夫の系次を言ひて
三書に言ふ所の系次を言ひて

さまが六書者九月二書
考史の物語多し
枝大學の物語多し
おまぬく
百目白地の物語多し
既考史の物語多し
の拍子系次多し
人考史の物語多し
の系次を言ひて
おまぬく系次多し
大系次を言ひて
世考史の物語多し
遺考史の物語多し
史の物語多し

大あり三年... 目か...
イ三天物...
先...
千種...
目か...

文政十一年

正月吉日

作者 八文舎自笑
梅枝軒泊鷺

書林 八文舎
河内屋太助

後者内百番 江戸の巻終

